サポちゃん通信

No.12

自然が好き

生きものが好き

目次

・サポちゃんも色々　2
・セミの鳴き声　4
・へえー　知らなかった　5
・今年出会った一番美しい蛾　6
・みんな、大丈夫？　7
・金ぴかの蛹　8
・田中馨コレクション　10
・２年目の新参者が語る…　12
・特別展「恐竜展２０２３」に行く　14
・コラム　森にはノネズミがたくさん　15
・表紙描いて四方山話　16
表紙・イラスト　原まゆみ

サポちゃんも色々

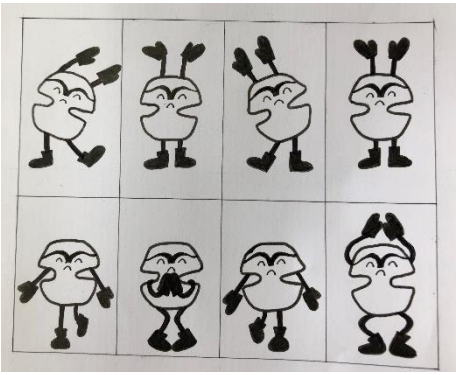
「サポちゃん通信」は動物分野の博物館サポーターの活動を記録したものですが、山口博物館では動物の他に天文、地学、植物、理工と計五分野でサポーターが活動しています。
現在４６人が登録していて、動物サポーターは毎週 10 人前後で活動しています。・・・しかし・・・間田がもう一分野参加している理工部門はわずか２人なんですよ。

理工…子供の世界でいえば機械っぽい工作かな、ド文系の間田にとって一番苦手なジャンルなんですが、なぜかもう 6 年続いています。メインは、夏休み工作講座です。テーマを決め、何を作るかアイデアを出し合って試作を重ねて工作キットを作り上げ、夏休みの 1 日、子供たちとあれこれ試行錯誤しながら工作を楽しみます。自分で作り上げた、できた！という満足感で目をキラキラさせる子供たちの姿、苦手分野なりに続けられている理由かもしれません。

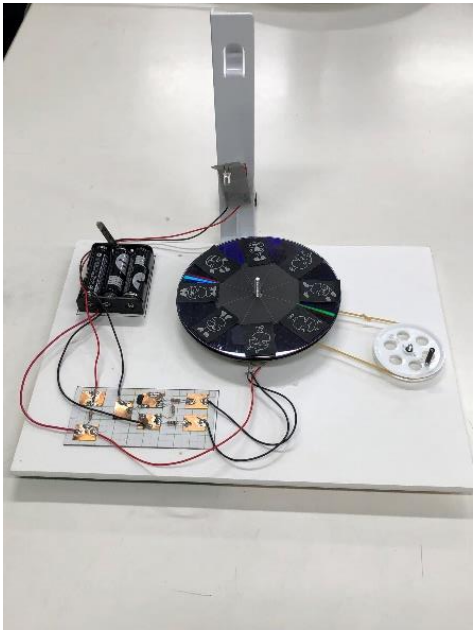
今年はアニメーションの原理であるゾートロープ（←今回初めて知った言葉です(^^ゞ)回転のぞき絵という意味）で、パラパラマンガみたいに

静止画が回転することで動いて見える仕組みを作りました。山口博物館ならではの特徴として、動かすイラストは開催中の「大考古博」に出品中の笑顔の分銅形土器が山口市市民総踊りでおなじみの「大内のお殿様」を踊っている様子にしようと、サポちゃん通信でおなじみの原さんにオリジナルイラストを描いてもらい、動物サポーターのみんなにも細々したキット作りを助けてもらいました。みんな「今年も工作の季節が来たね」と手際よくやってくれて、感謝感謝です。

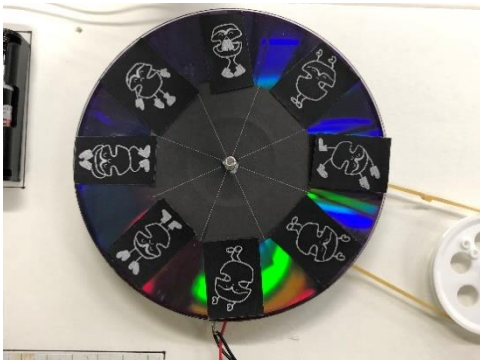
工作好きなあなた、理工のサポーターに仲間入りしませんか？大歓迎です！（間田　敬子）



分銅形土器の「大内のお殿様」踊り



科学工作講座で作成した
ゾートロープ

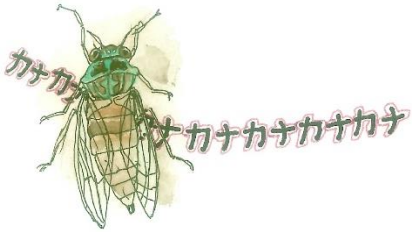


ゾートロープに配置された分銅形土器図

セミの鳴き声

暦の上では８月８日(2003 年)の立秋以降は「秋」ですが、なお猛暑が続き“真夏の風物詩”ともいえるセミの鳴き声が大きく響いています。先日、所用で北九州へ行った時、門司 IC で降りたとたんクマゼミの大合唱が聞こえてきました。山口市の中山間地区にある我が家ではアブラゼミの鳴き声が多く聞こえるのに、関門海峡を渡るだけでセミの鳴き声が大きく違うことに気付かされました。某気象予報会社によると「あなたの街で一番聞こえるセミの声は？」というアンケート調査を実施したところ関東甲信ではミンミンゼミ、西日本ではクマゼミ、北日本や日本海側ではアブラゼミが多い結果となったそうです。セミは種類によって鳴く時間帯が異なったり地域によって生息する種類が違っていたりと実に興味深い生き物です。

さて松尾芭蕉の俳句に“閑かさや岩にしみ入る蝉の声”という有名なものがありますが、その中のセミの声は、果たして何のセミだったのかという疑問が湧いてきました。調べてみるとそのセミの種類に関して論争になったことがあったそうです。歌人の斎藤茂吉はこの句に最も似つかわしいのはアブラゼミの声であると主張しましたが、他の文人から「この句を詠んだ元禄２年５月末は太陽暦に直すと７月上旬となり、アブラゼミはまだ鳴いていないのではないか」という指摘があり、その後、現地調査などの結果をもとに芭蕉が聞いた鳴き声はニイニイゼミであったという結論に至ったそうである。個人的にはこの句に似つかわしいのは夕暮れの深山から響くヒグラシの哀しげな鳴き声ではないかと思います。みなさんはどのように思いますか？（村上　敬司）



へえー　知らなかった

春先から活動日はどういう訳か天候不良で中止が多く、「とり虫（むしのてき）」の私としては残念なため息が、ああぁ。

6 月 10 日、今日は行けそうです。そして前からずーっと狙っていたアカガネサルハムシを遂に初ゲット!!　とっても嬉しかったです。他には、カラムシの葉にぶら下がった大きなヘビトンボもみつけました。

私が初めてヘビトンボを見たのは、サポーターになって間もない夏の早朝、山口駅のホームでした。図鑑で目にしていたのでアレだなとすぐに思いました。それから後に、初夏の昆虫観察の時、糸米川で子供達が捕まえた水生昆虫が入ったバケツの底に、足がいっぱいの虫がいますが見た事のない虫・・・何だろう？それはヘビトンボの幼虫だったのです。肉食性で 2～3 年水中で生活し、終齢幼虫は春から夏にかけて河岸に上陸し、土や朽木の中で蛹になり、10 日くらいで羽化するそうです。成虫は夜行性で、大きなアゴで昆虫も食べますが広葉樹の樹液も好むようです。

あのヘビトンボはすぐ近くの椹野川で生まれ育ち、ライトトラップのように駅の灯りに誘われたのでしょうね。今回調べていて知ったのですが、この幼虫は「孫太郎虫」と呼ばれ、茹でて乾燥させたものが疳（かん）（子供のかんしゃく・夜泣き）に効く民間薬として今も通販で入手する事が出来るんですって。（山田　恵美子）

アミメカゲロウ目ヘビトンボ科
ヘビトンボ　開張 80-100 ㎜

通称「孫太郎虫」ヘビトンボの幼虫

今年出会った一番美しい蛾

蛾は非常に種類が多く、同じエリアで採集を続けていても、毎年これは初めて見つけた、と思う種類に出会う。

そんな出会いの中、今年一番美しいと思った種類を紹介する。

科名；コブガ科　　和名；アミメリンガ　　開張:33㎜ 内外

翅の地色はやや黄色みを帯びた白色で，淡黄色の網目状の斑紋がある．翅頂付近と外縁に黒点列がある．後翅は白色．

兄弟山（おとどいやま）林道を上りながら、山側の下草をたたいていると小さな蛾が飛び出してきた。すぐに下草の間に入ってしまうのでなかなか捕まえられないが、逃げた先をよく見て再び捕虫網をかぶせ、ガサガサ揺らして飛び出してくるのを待って網の中に誘導。ようやく捕まえた１頭である。

決して珍しい種類ではないが、羽化したての鮮やかな色が印象的な個体であった。

これからも、また新しい種類との出会いを期待している。（吉本 進）

みんな、大丈夫？

日本の観測史上、最も平均気温が高かった今年の 7 月は、えっ！？と思うことが身近にたくさんありました。自宅近くではコスモスやシュウメイギクが咲き、ツクツクボウシは 22 日、スズムシは 30 日に鳴き始めました。

庭にジャコウアゲハの幼虫の食草ウマノスズクサを植えているので、毎年たくさん羽化します。ちなみに、この幼虫は時速 36m で移動し、2 日がかりで蛹になる場所を探すそうです。困ったことに幼虫たちは草や木、建物の壁や柱、ウッドデッキやフェンスなど至る所で蛹になるため、足元や頭上、草刈りや剪定に気を使います。今年は例年に比べると低い所でたくさんの蛹を見かけました

猛暑だけでなく、7 月は線状降水帯が発生したため大雨が降りました。昆虫採集でお世話になっている鴻の峰は、土砂崩れや倒木でかなり荒れており、多くの虫などの生き物や植物が流されたことでしょう。それでも花は咲き、鳥やセミたちはにぎやかに鳴き、葉をめくると虫の卵があり、命をつなぐ営みは続いています。

6 月にはホタルが舞う自宅近くの川も増水して激流になりましたが、来年もまたホタルに会えると信じています。

みんな、大丈夫じゃないでしょうが、年々厳しくなる環境のもとでも懸命に生きるたくましさを多くの生物から感じています。（上田　貴子）

ｼﾞｬｺｳｱｹﾞﾊの成虫と蛹

土砂崩れのあった鴻ノ峰の現場

近くに咲くｷﾂﾈﾉｶﾐｿﾘ（7 月）

金ぴかの蛹

5 月 27 日，鴻の峰での昆虫採集活動で，珍しい蛹を見つけた。蛹の腹の部分とでもいうあたりのいくつもの突起がメッキされたように金ぴかだったのだ。蛹全体は白く，金色の突起はとても目立っていた。サポーター仲間に聞いてみると，ツマグロヒョウモンの蛹ではないかと教えてくれた。ツマグロヒョウモンは鴻の峰ではよくみかける蝶だが，蛹を見つけたのは初めて。さっそく家に持ち帰って，羽化を待つことにした。

プラスチックの虫ケースに，蛹のぶら下がっている葉をなんとか固定して，リビングに置いて観察を開始。持ち帰ったときは白っぽかった蛹が，日に日に茶色味を帯びてきた。金色もそれに伴い輝きが増したように感じられた。ピカピカ感が半端ない。ネットで調べたところ，羽化までは１週間程度のようだった。

１週間後の６月４日の朝，蛹はつやつやとしたきれいな茶色になっていた。羽のような模様が透けて見えるような気がする。そろそろだと感じたが，朝方に羽化するものとばかり思っていたので，翌朝が X デーだろうと予想した。写真を撮ってから外出したのだが，帰宅した１６時半ころには，すでに蝶がケースのなかで羽ばたいていた。羽化の瞬間を見られなくて残念だった。

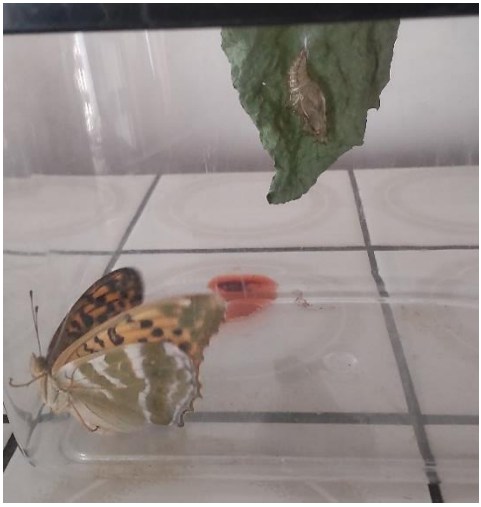
出てきた蝶はツマグロヒョウモンではなくミドリヒョウモンの雌だった。庭の木の枝にとまらせてやると，しばらくはじっとしていたが，30 分後には飛び立ったようで，姿が見えなくなっていた。調べてみると，ツマグロヒョウモンとメスグロヒョウモンも，蛹に金色の突起を持っていることがわかった。また，沖縄の県蝶オオゴマダラの蛹は全体が黄金色に輝いているそうだ。

蝶が出たあとの抜け殻は，黒みがかった透明だった。金色はどこにもない。金色はどうなったのだろう。突起は枯れ葉の擬態で，金色は枯れ葉の穴から漏れる光を再現しているらしい。飛べるようになれば，擬態は必要ないから消えてしまうのだろうか。

自然界には不思議なことがたくさんある。（村中　明子）

採集直後のミドリヒョウモンの蛹

羽化直前のミドリヒョウモンの蛹



羽化したミドリヒョウモン　メス

田中馨コレクション

昨年 11 月、博物館の長机の上に段ボール箱がずらりと並んでいました。宇部市の田中馨さんが寄贈された昆虫標本です。

開けてみて、まずビックリしたのはその数。ドイツ型標本箱の大型サイズ約 70 箱、中型サイズ約 150 箱にぎっしりと虫たちがならんでいます。つぎに驚いたのはその緻密さ丁寧さ。一体一体、脚・触角の細部にわたるまで綺麗に整えられ特徴をとらえています。きちんと同定され、同一種は整列したかのように同じ形です。思わず目を見張りました。

今回のサポーターの仕事は標本整理です。標本一体ずつに固有の登録番号を記入したコレクションラベルを付けて、学名・種名・採集日・採集者等々の情報とともにデータベース化するのです。

作業を進めていくに従って、段々と田中さんに興味がわいてきました。「田中さん GW もお盆も祝日も採集なの?」、「ひょっとして同じ時期同じ場所で採集している?」、「宇部市小松原 2 丁目・風呂ケ迫での採集が多いのはなぜ?」

採集地は、東は岩国市松ノ木峠や周防大島町鯛の峰から西は下関市蓋井島、まさに山口県全域です。中には年代を感じさせる標本もあり、丁寧に手書きされたラベルが少し黄ばんでいます。

「何歳から昆虫採集していたのかな?」

入力済のものだけ調べてみると 1960 年の標本がありました。現在 82 歳の田中さん、なんと 19 歳の時のものです!! そのアカクビボソハムシ標本は 63 年経っているとは思えないほど綺麗です。

アカクビボソハムシ

標本整理は 8 月時点でようやく 33 箱目、登録番号は 10,000 を超えました。まだまだ続きます。昆虫愛のこもった田中コレクションは博物館で大切に保管され、昆虫好きな人達の目をくぎ付けにすることでしょう。（藤田　かおる）

田中馨昆虫コレクション

カミキリムシ科標本　ミヤマカミキリ他

コメツキ科標本　ヒゲコメツキ他

２年目の新参者が語る…

博物館のボランティア活動も２年目になりました。しかし、…。私生活でいろいろありまして、数える程しか参加できていません。昨年は、夏の動物展に向けて訳も分からず、がむしゃらに参加していました。ある意味学校の文化祭の展示に向けて活動しているようで、とても懐かしく思っていました。

今年の春のイベントは、『山菜天ぷら食べ尽くしの会』からでした。やはりおいしいものを食べると「ワクワク・ドキドキ」ですね。食べきれないほどの季節のものを身体に入れるのは、人間としての一番の幸福と思います。それぞれの民族が、それぞれのおいしいものをその季節その場でお互いに食しあえたら、分かり合えるのではと思うのです（甘いかもしれませんが…)。そんな思いにさせてくれた会でした。是非またしたいですね！！

その後、それこそいろいろありまして…。

飛び飛びに参加したのは、昨年度少し教えていただいた、昆虫標本の資料データ作りでした。久しぶりのパソコン入力です。コレクションラベルの小さな文字を見るのは上田さんや山田さんにお願いして、脳トレのようにキーボードを打たせてもらいました。エクセルは久しぶりで「あ

れー、もう一度お願いします。」と何度言ったことか。

待っていただきながらも、昆虫の亜科や採集場所・年、採集・同定者など、この標本を作製するために携わった方々の活動がとても気になりました。研究のためには、地道な活動と蓄積があればこそです。特に、自分の出身地や生まれた年に近い標本を見ると感じます。この昆虫が私と共に生まれて生きたのだと。

最後にミーハーな私は、早速お気に入りの昆虫に魅了されました。見た目ですけど和名は「ヤツボシツツハムシ」。あの神々しい色は自然の宝石です。（平川　清美）

ヤツボシツツハムシ

ハムシ科標本　アカガネサルハムシ他
（田中馨昆虫コレクション）

特別展「恐竜博２０２３」に行く

７月１２日（水）７：３９の新幹線で新大阪駅へ、そこから御堂筋線で「長居公園」下車歩いて１０分程の「大阪市立自然史博物館」で「恐竜博２０２３」を日帰りで見て来た。

事前に問い合わせると、東京と違い日時予約なしで、期間中いつでも大丈夫で夏休み期間は避けて欲しいとの事。前売り券で大人￥1600。展示室は３部屋で、展示してある恐竜は、どれも見上げるばかり。出口近くにドード-の骨格標本もあった。

ティラノサウルス

鎧竜ズール・クルリヴァスタトル

ヘスペロサウルス

ドードー

コウガゾウ（黄河象）

トリケラトプス

大阪市立自然史博物館の常設展も入場できるので行って見た。コウガゾウ（黄河象）の頭骨、トリケラトプスの頭骨が迫力あって良かった。又、アンモナイトの化石は触ってもOK。恐竜博よりこちらの方が見学するのに時間がかかった。

長居公園内に植物園もあったが、もう暑くて見る気力も無く、長居は無用と昼過ぎに新大阪駅から帰ろうとしたら、新幹線の車輌点検で３時間も待たされて帰宅は夕方遅くになった。（本間　喜美恵）

コラム　森にはノネズミがたくさん

森には地下を住みかとするノネズミが生活しています。代表がアカネズミとヒメネズミです。アカネズミは最も身近なノネズミで、小さな森でも生活できます。林の中にはいり、手ぐわで地面を掘ってみるとアカネズミなどの通り道であるトンネルがあります。出入口は木の根の下や地面などにあり、よく見ると掘り出された土があり、よく使う巣穴は入り口が踏み固められています。

ノネズミは、昼間は地下の巣穴で休み、森が暗くなる夜に活動しています。秋、ドングリが落ちる季節になるとドングリを口にくわえて巣穴に運び貯食します。ノネズミの天敵はフクロウなどの夜行性の鳥類やキツネなどの哺乳類です。ネズミ類は人が感知できない、高い周波数の音域を使いコミニュケーションしていると考えられ、その音や匂い、夜でも見える目などを頼りに捕食していると思われます。ノネズミたちの動きは俊敏で、軽快です。小さな動物を捕食する動物たちも大変だと思います。（田中　浩）

アカネズミ　体重 30-60g

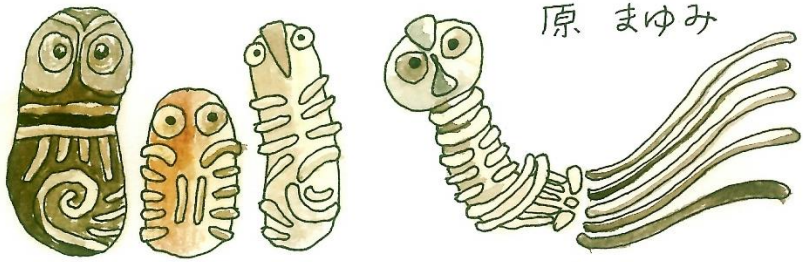
ヒメネズミ　体重 14-20g

森の中のノネズミの巣穴出入口　木の根の下（左）掘り出した土（右）が目印

表紙描いて四方山話

今年の特別展は『やまぐち大考古博』です。
専門ではないので詳しいことはわかりませんが、貝の装飾を見ると"これはタカラガイ，こっちはカサガイだね！"と、貝の分類をした時の思い出が…❤ 瓦や銅鏡を見ると"四獣は何の動物？"など違った疑問がわいてきます。考古はちょっと苦手と思っていましたが、人それぞれ、違った楽しみ方ができますネ!!

原　まゆみ



山口博物館サポーター動物班活動報告　"サポちゃん通信"No. 12
発行　2023 年 8 月 31 日
編集　山口県立山口博物館サポーター動物班
発行　山口県立山口博物館　〒753-0073 山口市春日町 8-2
Tel 083-922-0294　Fax 083-922-0353
サポちゃん通信バックナンバーも閲覧可能
http://www.yamahaku.pref.yamaguchi.lg.jp/supporter.html